

遊牧経営の周年的活動に関する研究

飼養管理・加工作業および年間行事

誌名	農業経営研究
ISSN	09110453
著者名	志賀,永一 甫尔,加甫
発行元	北海道大学農業経営学教室
巻/号	21号
巻号補足	
掲載ページ	p. 77-98
発行年月	1995年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



遊牧経営の周年的活動に関する研究

—飼養管理・加工作業および年間行事—

甫尔加甫・志賀永一

1. はじめに
2. 遊牧経営の構造的特徴
3. 移動経路と営地の性格
4. 遊牧経営の年間作業
 - 1) 飼養管理作業
 - 2) 加工作業
 - 3) アウル内の作業分担
5. 遊牧地域の年間行事
6. むすび

1. はじめに

遊牧経営の実態は如何なるものであるか。この問題を解くために、まずもって遊牧経営が1年を通じていかなる営農や生活を行っているかを示し、その実像を明らかにしておく必要がある。遊牧経営の年間作業や行事については、特定の時期を対象にマスコミ報道を通じての紹介がみられるが、年間を通じて紹介されることはほとんどない。また、そこで行われる作業や行事が何故その時期に行われるか、といった技術的、自然的、および経済的背景の考察もみられない。そこで本稿では、第1に遊牧経営の年間作業を家畜飼養管理作業と加工作業に区分して紹介し、第2にそれら両作業実施の相互関連を検討する。さらに、第3に遊牧地域の年間行事を紹介した上で、それら行事が遊牧経営の年間作業実施とどのような相互規定性を有するかを検討する。本稿の対象地域は新疆ウイグル自治区アルタイ地区フーユン県クルト郷の3つの遊牧村（註1）であり、そこで展開されている垂直的（註2）遊牧経営の担い手であるアウル（註3）である。

2. 遊牧経営の構造的特徴

新疆地域における遊牧経営は、アルタイ山脈・天山山脈・コンロン山脈を舞台にして、その殆どが垂直的移動を伴い、主にモンゴル・カサフ・キルキス・タジックといった少数民族によって担われている。これら民族によって数千年にわたって展開されてきた遊牧経営は、独特の原理や構造的特徴を形成してきたが、対象地域における遊牧経営の構造的特徴を概略的に整理すれば、以下の4つを指摘できる。

第1の特徴は自然条件と家畜の飼養管理を最優先した营地（註4）設定と利用方式である。この营地の性格と利用方式について3で詳しく述べることにする。

事例地区の营地（後述図1を参照）は、北の山間地帯を夏期間の营地、南部の砂丘地帯を冬期間の营地、その中部地帯を春秋期間の营地として設定されている。このように設定した营地を季節に応じて適時移動利用していく必要があるため、この地区は長距離移動（300 kmから480 km）と厳しい標高差（900 mから2700 m）による垂直的移動というパターンを合わせもっている。この移動は、基本的に水と草の植生という2つの要因が規定要因となっている家畜の移動である。

第2の特徴は新疆遊牧地帯全般において羊を主体とした生産構造をもっており、表1に示すように家畜全体の6割以上が羊である。これは上述の自然条件によ

って設定された营地は基本的に羊の生理状況に合わせた营地設定であり、主に羊によって利用されているのである。羊は山間地帯における険しい营地を利用できるのであり、しかもどんな家畜よりも生産周期が短い。つまり、羊を春に生ませて、仔畜を夏营地で訓練しながら太らせて、秋に後継畜や販売畜として処理できるのである。そのために夏营地で羊の頭数が増えて

表1 新疆遊牧地帯における5種畜の構成(単位：%)

項目	新疆 地区	アルタイ 地区	フーコ 県	遊牧 村	調査アル 平均
羊	78.9	61.0	65.0	76.1	79.0
山羊	15.3	15.0	15.6	9.3	10.3
牛	11.2	15.3	9.4	5.4	4.5
馬	3.4	6.0	6.7	5.1	3.7
駱駝	0.6	0.7	3.7	3.6	2.7

（資料）「新疆農業統計年鑑」（1991年）と94年5月と9月の現地聞き取り調査資料より作成。

も、それにみあう草条件のある营地が設定されているのである。したがって、羊が家畜の主体とならざるをえないのである。

第3の特徴は羊が主体であるとはいえ、羊を含めた5種畜（註5）を必要とすることである。この理由をまとめたのが表2である。移動によって展開する遊牧経営は、遊牧経営内部における家畜相互間の役割と生活上の必要性から5種畜を必要とするのである。例えば、山羊は移動や放牧の際の先導役と夜の監視役を、馬は放牧管理担当者の交通手段役を、雄役牛（駱駝が足りない場合）と駱駝は引越移動の際の運搬役を果たしている。さらに、表2に示したように乳は遊牧民の乳製品加工の原料となり、その毛皮は生産と生活用品の原料となることである。遊牧経営の展開に必要な役畜や用畜と生活用品を経営の外部から購入する市場条件がないため、経営の内部での繁殖増加によって確保するという伝来のやり方を継承するしかないのである。

表2 5種家畜の役割と必要性

畜種	役割と必要性
羊	1. 主要な商品生産の対象としての家畜 2. 主要な収入源をもたらす家畜 3. 消費しやすい家畜 4. 毛はフェルト作りの原材料 5. 乳は乳製品作りの原材料 6. 家畜間の交換手段として利用
山羊	1. 先導家畜として利用 2. 監視家畜として利用 3. 秋の消費に利用 4. 毛はロープと飾り紐作りの原材料
馬	1. 交通手段として利用 2. 冬肉として貯蔵消費 3. 皮は生産道具として加工利用 4. 補完家畜として利用
牛	1. 乳搾り 2. 冬肉として貯蔵消費 3. 皮は生産道具として加工利用 4. 補完家畜として利用
駱駝	1. 運搬家畜として利用 2. 毛は糸として加工利用

(資料)94年9月の現地聞き取り調査資料より作成。

第4の特徴は遊牧生産の担い手が大家族あるいは2-3の小家族が結合したアウルという生産単位で担われていることである（表3）。5種畜を必要とし、移動を伴う遊牧経営は、本稿で詳述するように、季節に応じた作業や移動に伴う當地設定作業に作業分担による多数の労働力を必要とすることがその要因の1つにあげられよう。対象地域の各遊牧村はそれぞれ200戸（家族）近くの遊牧民から成り立っているが、それはさらにそれぞれ50-60個のアウルに組織されている。

表3 対象地域におけるアウルの経営構造

項目	トハイ アウル	チャメルハン アウル	ウムテイハイ アウル	ガルバツグ アウル	トロウハイ アウル	ダレメルハン アウル	トホタル アウル	アカン アウル
所属する遊牧村	第3村	第3村	第2村	第3村	第2村	第3村	第3村	第1村
家族数 (戸)	4	5	3	5	1	6	3	4
人口 (人)	22	19	23	24	9	22	19	16
労働力数 (人)	9	13	9	12	5	15	9	7
大畜主牧者 (人)	2	2	2	2	1	2	2	2
小畜主牧者 (人)	1	1	2	2	1	3	1	2
小畜助牧者 (人)	1	2	2	2	1	2	2	1
兼業者 (人)	1	2	-	3	-	1	1	-
羊頭数 (頭)	321	124	277	142	214	358	477	487
山羊頭数 (頭)	44	30	14	31	38	22	59	35
牛頭数 (頭)	29	10	7	12	13	18	16	22
馬頭数 (頭)	20	6	11	7	15	11	16	20
駱駝頭数 (頭)	10	8	9	4	7	12	5	15
採草地面積 (ha)	30	54	44	47	20	36	44	35
夏営地面積 (ha)	6733	1008	8280	12457	2040	5107	8262	3759
春秋営地面積 (ha)	9744	1682	17250	22804	4250	24475	1195	17345
G地区冬営地面積 (ha)	1252	2163	12075	20213	2975	22716	1537	41886
F地区冬営地施設	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り
年間移動回数 (回)	50回	30回	60回	56回	60回	64回	60回	60回
年間移動距離 (km)	350	300	400	400	420	480	400	420

(資料) 94年5月と9月の現地聞き取り調査調査資料より作成。

3. 移動経路と営地の性格

すでに示したように遊牧経営の特徴の第1は空間的な移動を伴いながら、家畜飼養が行われることであり、そこでは植生の季節的循環の差異に即した営地が形成されている。それぞれの営地は自然条件が異なり、そのため利用時期を異にするのであるが、何よりも家畜の生理・成長ステージに合わせた適地飼養に配慮した営地設定が行われることを見逃すわけにはいかない。以下では図1をもとに各営地の性格について整理する。

後部夏営地：A地区

A地区は、定住して利用され、利用時期は7月1日から8月25日までである。この営地を利用する主な家畜は羊と山羊で、家畜全体の8割以上を占める。残りの2割弱が搾乳されない牛と役畜以外の馬である。したがって、この営地は主に羊の肥育管理の場所として利用されている。標高は2700mと高く、6月末まで残雪が残り、気温が仔畜の放牧管理に適さないため、7月からの利用となる。この地区は地形が険しく、傾斜地を利用できる羊と山羊に適しており、草量と水の確保の上で他の営地より優れて、森林も豊富にある。このため放牧時に林間の日陰を

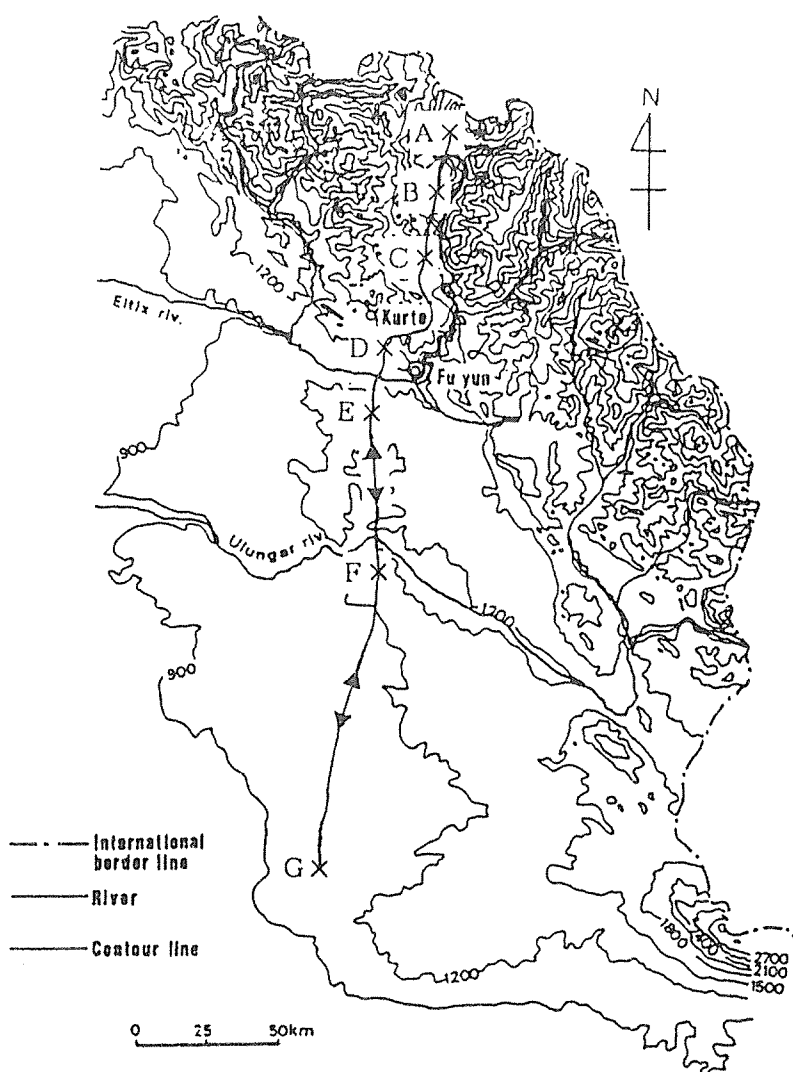


図1 遊牧経営の移動ルートと营地設定

(資料) 安江健氏の原図提供により作成。

注) A~Gは营地の場所を示す, $\longleftrightarrow$ は移動ルートを示す。

利用できる。草地は草丈が長く、先に高い草を好む牛に採草させ、その後に羊を放牧するという放牧方式がとられる。しかも草量が豊富であるため、2ヶ月という短期間の利用であっても家畜の肥育に共用するのに適している。A地区では遊牧生産の単位であるアウルは広く分散しており、アウル構成員の大半は駱駝以外の家畜とともにここで定住し、家畜の肥育作業を行うが、アウル構成員の一部、特に長老たちはB地区に残る。これはA地区の地形が険しく、駄載利用した駱駝が滑落事故死するのを防止するため、B地区に連れ戻して分娩した牛と一緒に放牧管理を行う必要があるためである。この他にB地区には学校が設置されているためアウルの就学者もこのB地区にとどまる。

A地区には畜舎施設や家畜治療施設はないが、各村の移動出先機関である村ケンセ（行政組織）は遊牧民と一緒に移動する。一般的に村ケンセには無線機が配置され、村担当者・村医務員・村獣医員が駐在する。彼らは定期的に散居している遊牧民を訪ねて、諸種の問題解決に努めるが、担当者だけで解決できない時に無線機でB地区に設置されている郷ケンセと連絡をとる。村ケンセは移動するが、郷ケンセはいかなる當地からでも郷政府や県の畜牧局との連絡は可能である。

手前夏當地：B地区

B地区の利用時期は、A地区へ移動する前の6月1日から25日まで定住して利用し、A地区から戻る9月上旬頃に一時定住して利用する。駱駝はこの當地を約100日間利用するのに対して、駱駝以外の家畜は約40日間しか利用しない。標高は2000m前後で、水と草量が豊富で、地形はA地区に比べ険しくない。6月には遊牧の生産単位であるアウルが比較的せまい範囲に集まるため、郷政府が設置した家畜医療施設がある。そこで家畜の放牧管理を行いながら1回目の家畜の薬浴と家畜の治療・去勢・毛刈作業を行う。9月上旬の利用は家畜の薬浴を行うためで、薬浴作業が終了しだい移動する。

先に述べたように6月末にA地区に移動したあともアウルの構成員の一部である長老や就学する子供は9月上旬までB地区に残る。長老はこの當地を利用して連れ戻された駱駝の放牧管理を行い、子供は学校に通う。そして9月上旬にはアウルが再結合して、家畜の薬浴作業を終え、ともに移動する。B地区では5月末から9月上旬まで郷のケンセが開設され、A地区のケンセと常時連絡をとる。郷ケンセはA地区には移動せず、村ケンセのみが移動する。また移動式学校がこの地区に設置されているが、子供の教育は年間2回に分けて行われ、1回目はこの地区で、遊牧民がA地区にいて戻るまでの約3ヶ月、2回目はF地区で11月から翌年の3月までである。郷ケンセには郷担当者・郷医務員・郷獣医員・郷教員が駐在している。このようにB地区では遊牧民の社会ともいうべきものが一時的に、とくにアウルの集合する6月に形成されるのである。

過渡的春秋營地：C地区

C地区は、標高1300mから2500mの間であり、草や水は豊富にある。B地区へ移動する前の5月15日から6月1日までとB地区から戻る9月上旬から月末までの2回5種畜によって利用されるが、断続的移動をくりかえす。ここにはいかなる施設もない。郷および村ケンセは遊牧民と一緒に移動するが、5月や9月末に遊牧民より先に前方營地に移動し、その受け入れ準備を行う。5月15日から6月1日までの遊牧民の移動速度は前方營地の天候と訓練中の仔畜の移動速度に規定されるが、B地区に適時到着するように移動速度を調整しなければならない。そして9月上旬から月末までの移動速度は現在地の天候状況と移動先のD地区の草の状況に規定される。

春秋營地：D地区

D地区はC地区へ移動する前の4月1日から5月15日までとC地区から戻る10月1日から25日までの2回定住して5種畜によって利用される。標高は1300mで、草や水はやや少ないが、短期間の利用には困ることではない。ここには仔畜の畜舎以外の施設はないが、郷ケンセや村ケンセが隣あって設置され、各アウルも近接して集合し、郷政府の居住地と県の所在地にも近く、遊牧地域の社会が形成される時期である。社会が形成されるといっても春は家畜の分娩作業で多忙をきわめる。

羊交配所：E地区

E地区は、D地区から戻る11月1日から15日まで1回定住して、羊の交配作業を行うが、それ以外は全く利用されない。標高は1300mである。ここには各遊牧村の羊交配所が設置されている。ここでは再びアウル構成員が分かれ、大半は残って家畜の交配を行うが、長老や就学する子供はF地区へ先だって移動する。その際に牛や馬などの家畜を先行してF地区へ移動させる。

定住地：F地区

F地区は、E地区から戻る11月10日頃から翌年のD地区へ移動する前の3月20日頃まで定住して利用される。飼養家畜は牛が主体であり、その他に若干の弱った家畜と消費対象および来春に販売する家畜などである。この地区の標高は1200m、河沿い地形で、雪に埋まらない高い草があるので、牛の昼間の放牧に適している。アウルの長老を主体とする遊牧村と農耕村が隣あい、学校・病院・周年固定ケンセ・商店などが揃っている。このケンセにも無線機が配置されている。このクルト郷のケンセは合計5つで、郷の出先移動ケンセとその所轄にある3つの遊牧村移動ケンセと周年固定ケンセである。これによって通信手段が確保され、行政機関だけではなく、分かれた各アウルの連絡にも利用される。

冬營地：G地区

G地区は、E地区から戻る12月15日から翌年のD地区へ移動する前の3月15日まで

定住して利用され、牛以外の家畜が飼養される。羊・山羊・馬はテブン・マルと呼ばれ、雪下の草を掘って食べるが、駱駝は高く生えた駱駝草を食べる。したがってこの営地はこれら家畜の放牧管理に適している。標高900m前後である。11月中旬頃アウル構成員の一部はE地区での羊交配を終え、F地区を通過して、先行移動された大家畜をつれてG地区へ移動する。その到着は12月15日頃である。この地区に水がないため、雪水に頼らざるをえず、12月の降雪とともに利用を開始し、3月の雪どけには移動するのである。移動はD地区への移動であり、途中のF地区に居留していたアウルと再結合して、移動を継続するのである。このG地区では、郷ケンセと村ケンセが協力して濃厚飼料を調達し、遊牧民に販売している。

4. 遊牧経営の年間作業

1) 飼養管理作業

上述の各営地の移動ルートと性格に応じて、遊牧経営は家畜管理作業をどのように行っているかを表4に示した。表頭には英字で定住または通過する営地を、その下に(定)で定住期間を、実線で急速な移動期間を、点線で断続的移動期間を示した。断続的移動は2-3日に一回か5-6日に一回の移動を示す。そして表側に家畜ごとの作業を示した。

12月15日から3月15日までの作業はG地区とF地区の両地区で行われるため、アウルの構成員は2つにわかれなければならない。G地区には牛以外の家畜が放牧管理される。作業は羊と山羊の管理者が同行する日帰り放牧と弱った家畜への餌給与、そしてコラへのコング(註6)入れ替えとその改善補修、馬の定期的居場所確認、駱駝の日帰り居場所確認と2月の駱駝交配などである。これら作業は成人男子2人を必要とするが、1人の成人男子が羊の日帰り放牧を専門に同行して担当し、もう1人の成人男子は羊コラのコング入れ替えと改善補修を毎日行う。その後に駱駝の日帰り居場所確認と馬の定期的居場所確認という作業順序となり、羊の放牧管理作業が優先されるのである。さらに、飲用水確保のための雪集め・食事作り・洗濯・燃料調達などの家事労働を行う成人女性1人が必要となり、赤ん坊がいればその世話をする子供1人が必要である。従って、最低成人労働力3名(男2人、女1人)が必要となる。

F地区での作業は主として牛の放牧管理作業である。そこでの作業は朝晩の乾草と飼料の給与と糞尿処理、および日帰り居場所確認作業であり、これは大人2人を要する作業である。それから家事やその他の作業を考慮すれば、この営地には、少年作業者を合わせて5人が必要である。両営地では家畜の放牧管理の作業が単

純化され、滞在期間も長く、引越移動作業がないため労働力数が少なくても、アウルを分けることが可能である。

3月15日から4月1日（F地区でアウルが結合される時期）、さらに11月15日から12月15日（E地区でアウルが分割される時期）の間は引越移動作業が行われる。そこでは引越移動先の選定と引越移動担当者が必要となる。引越は家族や家具の引越であり、移動は家畜の移動を指す。従って通常はF地区にいるアウルの成人男子1人が、D地区への引越移動の手伝いに出向き、G地区への引越移動の場合には送り届けるという方法がとられる。その場合1人が羊の移動を担当し、2人が大家畜の移動と家族の引越を担当し、1人が引越移動先を先行して選定する。この引越移動先の選定作業はこの時期にしか行われない。その理由はG地区への引越移動時の家畜の体力の消耗を寒さから防ぎ、D地区への引越移動の際に体力維持と流産を防ぐために先行選定作業が必要になるからである。選定される場所は羊が一日に楽に移動できるところにあるコングと呼ばれる場所である。この際の引越移動速度は羊の移動に規定されるので、人間や大家畜の移動も羊の移動に従属する必要がある。

4月1日から5月15日までの作業はD地区で行われる。ここでの作業は分娩・仔畜訓練作業であり、これら作業は4月上中旬に集中する。仔畜訓練は少年による毎日の作業であり、この作業は7月下旬に仔畜が離乳するまで続けられる。この作業は昼に行われ、仔畜の群れを常時寝かせないで放牧し、さらに一日朝晩2回の搾乳が終わった後に母畜と一緒に1時間くらい放牧する。この作業により仔畜の成長を速めるのである。分娩は少年を含めたアウル全員の作業であり、さらに成人労働力は畜舎の補修消毒、放牧先で生まれた仔畜の運搬、仔畜と母畜の1対1の個体識別、母畜仔嫌い防止、余乳の搾り、仔畜の哺乳を担当する（註7）。

分娩作業が一段落する4月下旬から羊と仔畜の予防注射がはじまり、その後に昨年後継畜として残された羊の毛刈を行う。羊の作業を優先しながら大家畜の予防注射と大家畜の立て髪・山羊の毛刈、大家畜の去勢作業が行われる。これら作業は5月に入ってから本格化し、放牧管理作業と獣医師の立ち会い順番と調整しながら行われる男子の作業である。さらに家畜への塩分給与（5-10月までの朝晩の少年の作業）という作業が加わる。4月と5月は年間で最も多忙かつ作業の競合する時期であり、家畜の去勢や治療は遊牧村の獣医師の立ち会いを必要とするため、順番を待たなければならない。こうした多忙期にもかかわらず、5月上中旬には家畜と畜産物の販売作業も加わる。販売対象は必要以上の家畜の毛と販売目的で肥育した家畜、それから交渉価格が高かった家畜である。これは遊牧民の現金獲得の1回目の時期であるが、金額としては多くない。

5月15日から6月1日までは、上述した仕事の残りを移動しながら行う一方、

C地区を断続的移動によって通過する。この引越移動には重要な3つのポイントがある。1つは天気状況に合わせて前方地区に適時につくこと、2つは羊の仔畜を引越移動に慣らして訓練を行うこと、3つは9月上旬から月末までの引越移動の場合に前方地区の利用時期を調整するという点である。ここでの移動速度も羊とその仔畜の移動速度に規定されるのである。

6月1日から6月25日までは、B地区では母羊の毛刈を行い、ただちに薬浴ならびに治療作業が行われる。その後に大家畜の治療が続くのである。薬浴や治療は獣医師が立ち会うので、順番待ちの作業となる。しかし、この時期には作業競合が多くなく、時間的な余裕が発生する。このため、アウルが集合して地域社会が形成されていることもあって、親戚や友人のアウルと互いの家畜飼養管理作業を共同作業で行うことも可能で、家畜の飼養管理作業以外の作業実施も可能になる。

この後、アウルは6月25日から7月1日までの急速な引越移動を終えて、7月と8月はA地区で作業を行う。ここでは羊の肥育管理作業が重点的に行われるが、7月上旬に仔畜の去勢作業を行い、7月末に仔畜訓練を終える。8月上旬に仔畜の毛刈を行うが、この仔畜の毛刈には次のような理由がある。1つは仔畜の毛を刈ることによって仔畜は簡単に離乳してしまうが、母畜と分離して放牧することによって離乳させる手間がかからないからである。2つは刈り取った仔畜の毛で次の毛慣らしやフェルト作り作業を始めるためである。これは仔畜が離乳されることによって羊の搾乳や乳製品加工作業が終了し、それにたずさわっていた女性労働力が次の加工作業に対応できるからである。3つは仔畜の毛を刈ることによって仔畜としての段階を終え、トフト（註8）と呼ばれる成畜段階に入って後継畜や販売畜の対象となるため、母畜と一緒に肥育段階に入ることである。

8月25日から9月25日には、遊牧民は逆戻りしてB地区とC地区を通過する。この時期の作業には、2回目の羊を優先とする家畜予防注射と羊の薬浴作業（B地区）と2回目の家畜と畜産物の販売が行われる（C地区）。この家畜販売金額は遊牧民にとって年間最大のものである。

9月25日から10月25日のD地区では家畜への塩分給与作業を終え、獣医師の順番を待ち駱駝の去勢作業を行うが、遊牧民の保有している駱駝頭数は少ないため、作業量は少ない。この當地では羊の日帰り放牧（大人1人）と塩分給与作業（子供の作業）しかないので作業競合はほとんどなく、それに家畜の販売による現金収入がある時期である。ここでも地域のアウルが集合して、地域社会を形成するので、共同作業を行いながら遊牧民同志の交流や多様な作業をやれる時期でもある。

10月25日から11月1日は急速な引越移動作業を行い、E地区に到達して羊の人工交配作業を行い、さらに11月15日から12月15日まで急速な移動を行い、F地区とG地区に到達する。こうして再び移動と作業がくりかえされるのである。

2) 加工作業

遊牧経営においては家畜飼養管理作業以外に加工作業が行われる。それには生活用品の加工作業と生産用品の加工作業が含まれ、それを表5に示した。これら加工作業はG地区以外の各営地で行われるが、上述の家畜飼養管理作業の関連でみていくことにする。

まず12月から翌年3月上旬までにF地区で行われる作業をみていこう。この時期には男性は皮ロープ作り、馬具作り、パオの骨作りを行う。皮材料が11月の家畜屠殺により入手でき、道具も全てこの営地に保管してあるので、この時期の作業となる。またこの時期以外は家畜の飼養管理・引越移動作業に多忙をきわめるので、作業は中止となる。他方、女性はパオのフェルト作りと絨毯フェルト作りを行う。6月と8月上旬に刈り取った羊毛を原料に、8月(A地区)に現物の仕上げを行い、9月(C地区)にフェルトの二次加工と設計が準備される。そしてF地区で家畜飼養管理作業が単純化している時期に、細かい縫いあげを行い完成させる。この時期以外は引越移動や家畜の飼養管理または他の作業が重なるので、暇のある時期を選んで加工品準備作業を行うだけになる。さらに飾り材料作り作業が行われるが、7月と8月(B地区)に加工品の設計が行われ、細かい作業をもF地区で行うのである。

4月下旬から7月末までは母畜搾乳と乳製品加工作業である。この作業は分娩作業の終わった4月下旬から本格化する。これは羊の仔畜が哺乳によって体力を維持できるようになってから始める必要があるからである。5種類の乳製品を作る重労働であり、より多くの乳製品を加工するために搾乳作業が必要となり、大人女性2人と少年搾乳者2人が必要となる。

8月になると、フェルト現物を作るため毛刈りされた羊毛慣らしとフェルトの一次加工作業がはじまるので、乳製品加工作業は中止される。この作業は比較的重労働であり、男子労働者が必要となる。これは原材料である羊毛が生産されるために取り組まれるが、作業はA地区で行われるため、家畜の飼養管理と労働力が不足するから、一次加工にとどまらざるをえない。そしてその二次加工は、9月上旬にB地区に戻ってアウルが結合してからになる。もう一つの作業は乾草調製作業であり、F地区にある採草地まで成人男子労働力が出向かなければならない。

9月は駱駝フェルトと冬の衣料作りと調整しながら上述のフェルト作りの二次加工作業が行われる。駱駝フェルトというのは一冬中駱駝を寒さから保護するためにかぶせておくものであり、冬衣料とは戸外の作業に取り組む作業者の着物である。さらに家畜や畜産物の販売作業が行われる。これは遊牧民の2回目の現金収入の時期であり、金額として極めて大きいため、アウル・バス(註9)が担当する。

表5 遊牧地帯における年間の加工作業

定住・通過地区 定住・移動時期 加工作業 ↓	G・F F・E D C B B A B・C D E・F F・G											
	(定)			(定)			(定)			(定)		
	1月 上中下	2月 上中下	3月 上中下	4月 上中下	5月 上中下	6月 上中下	7月 上中下	8月 上中下	9月 上中下	10月 上中下	11月 上中下	12月 上中下
皮ロブ作り	○○○	○○○										○○
馬具作り	○○○	○○○										○○
ハシの骨作り	○○○	○○○							○○○			○○
ハシのフェルト作り	○○○	○○○	○						○○○			○○
絨毯フェルト作り	◎◎◎	◎◎◎	◎						○○○			◎◎
飾り材料作り	◎◎◎	◎◎◎	◎						○○○			◎◎
母畜搾乳開始				◎	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎				
乳製品加工				◎	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎	○○			
毛ロブ・糸作り							○○○	○○○				
羊毛慣らし							◎◎	◎◎				
フェルト作り							◎◎◎	◎◎◎	○○			
乾草調製							◎◎	◎◎				
駱駝フェルト作り									◎◎			
冬着物作り									◎◎◎			
家畜屠殺加工									◎◎◎		○○	

(資料) 94年9月と12月の現地聞き取り調査資料より作成.

註) ◎は連続的な集中作業; ○は他作業と調整できる作業.

10月は家畜の放牧管理以外に競合作業がなく、遊牧経営にとっては農閑期にあたる時期である。次に述べるように各種行事が行われるため加工作業も中断される。

11月下旬には家畜の屠殺加工作業が行われるが、この時期には移動引越や家畜の交配、そしてアウルの分割が行われる多忙時期でもあり、加工作業は再び中止される。

3) アウル内作業分担

以上は遊牧地域全体における作業のやり方ではあるが、次に具体的な一アウルを紹介し、その構成員による作業分担について検討する。事例は表3に示したマカン・アウルであり、表3に示したようにマカン・アウルは4家族で構成される大家族アウルである（註10）。マカン氏は本アウルのアウル・バスである。このアウルの作業分担やアウルの変化を表6に示した。

家族単位は本人K（70）、長女K s（16）が1家族（妻は既に死去）；長男K 1（37）、妻k 1（35）、長男（12）、次男（7）、長女（10）、次女（5）が1家族；次男K 2（34）、妻k 2（30）、長男（0）、長女（5）、次女（2）が1家族；三男K 3（25）、妻k 3（23）、長男（5）が1家族である（註11）。以上4家族で、1アウルを組んで遊牧作業をこなしている。

このアウルの命令系統は一般的には、K→K 1に伝えられ、K 1から所轄の作業者に伝わる。アウルが分割するB地区では就学する子供だけを残して、後継者K 1の家族と作業者K 2の家族とKの長女K sが構成員としてA地区に移動し、アウルが再び分割するF地区では就学する子供だけを残して、K 1の家族とK 2単身が構成員としてG地区に移動する。以下マカン・アウルのK 1を中心とした作業グループをK 1小組、それ以外のKを中心とした作業グループをK小組と呼ぶ。

K 1小組のA地区での作業分担についてみると、A地区への引越移動の際にK 3が補助として参加し、7月上旬の仔畜去勢作業が終わりしだいF地区での乾草調製のため、B地区へ戻る。K 1は大家畜の居場所確認を引き受け、K 2は羊の日帰り放牧に従事し、さらに2人は8月上旬の仔畜毛刈を行う。K sは7月の仔畜訓練を行いながら、k 1・k 2の乳製品加工を手伝うが、8月に入るとK 1・K 2の2人の男性とk 1・k 2・K sの3人の女性の協力のもとで毛ならしやフェルト作りの一次加工を行う。K 3は8月末に乾草調製を済ませて、再びK 1小組にもどり、K 1・K 2・K 3の男性3人でB地区への引越移動作業を行う。

B地区とC地区ではアウルの両小組は結合しており、Kは大家畜居場所確認・販売・群整理を全面に引き受ける。仔畜訓練は同じくK sが行い、k 1・k 2・k 3の協力をえて加工作業を行う。K 1・K 2・K 3は引越移動から家畜の飼養管

表6 マカン・アウルの作業分担とアウルの変化変化

場所	月 日	主要な作業	主要作業分担者	アウルの変化
G	12/15 -3/15	羊日帰り放牧 畜舎整理改善 給餌 居場所確認	K2 (年中担当) K1 (12-3月) K1 (12-4月) K1(12-3・7-8月)	アウルが分割状態にあり、本當地では経営者が後継者に指導権を委託している。
F	11/20 -3/25	家事雑務作業 牛・他家畜給餌 糞尿処理 居場所確認	k1 (年中) K (12-3月) K3 (12-3月) K3 (12-3月)	
G→D	3/15 -4/1	家事・雑務・加工 移動引越案内 引越大畜移動	k2・k3 (年中) K1 (12・3月) k1・K3 (12・3月)	F當地で分割したアウルが合流し、一緒に引越移動を行う。
D	4/1 -5/15	羊移動 分娩関係作業 仔畜訓練 塩分給与 予防・毛刈・去勢	K2 (年中) アウル全員 (4月) Ks (4-7月) Ks (5-10月) K1・K2・K3 (5・6・9・10月)	
D→B	5/15 -6/1	販売 居場所確認 引越移動	K (5・9・10月) K (4-11月) K1・K2・K3	アウルは一緒に移動
B	6/1 -6/25	家畜薬浴	K2 (6月)	
B→A	6/25 -7/1	引越移動	K1・K2・K3	アウルは一緒になる、地域のアウルが集合する。
A	7/1 -8/25	仔畜去勢 仔畜毛刈り	同上 (7月) K1・K2 (8月)	
A→D	8/25 -9/25	引越移動	K1・K2・K3	アウルは分割して、経営者はB地区に残る。
D	9/25 -10/25	家畜の体力維持 家畜群整理	K2 K	
D→E	10/25 -11/1	引越移動	K1・K2・K3	アウルは結合し、地域のアウルが集合する時期。
E	11/1 -11/15	羊交配	同上	
E→F	11/5 -11/10	引越移動 大家畜移動	k2・k3・Ks K	アウルは結合した状態。
E→G	11/15 -12/15	引越移動	同上	

(資料) 94年12月の調査資料より作成。

註1) K:マカン本人(経営者), K1:長男(後継者), K2:次男, K3:三男, Ks:10代の長女, k1:長男妻, k2:次男妻, k3:三男妻。

註2) アウルの「分割状態」とは、アウルを2つの當地にわけて家畜飼養管理を行っていることを示す。

理作業までの全てを引き受ける。D地区でも両小組は結合しており、春の分娩作業等を全員で行う。秋の場合は加工作業がなくなり、家畜飼養管理作業のみとなるが、それは基本的にK2・K3によって行われる。そして、E地区への引越と羊交配はk1とK1・K2・K3によって行われ、Kは大家畜とともにk2・k3・Ksと子供達をつれてF地区へ引越移動する。E地区で作業を終えたK1小组はF地区を通過し、G地区に引越移動を行うが、K3は送り届けてコラの修繕を終了させF地区へ戻る。

K1小组のG地区での作業分担は、K2が羊の日帰り放牧を引き受け、K1はコラのコング入れ替えと補修改善、弱った家畜の餌給与、大家畜の居場所確認と周辺管理作業を、k1は家事関係の作業を引き受けることになる。

K小组のF地区での作業分担は、KとK3が牛の飼養管理と生産用品の加工作業を引き受け、k2・k3・ksは生活用品加工作業を引き受ける。

以上のようにKはアウルの経営者、K1は基本的に生産部門の管理者、K2は羊生産部門の専門作業者、K3とKsは補完作業者であり、k1・k2・k3は生活用品加工作業という作業分担がとられているのである。

5. 遊牧地域の年間行事

これまで述べてきた飼養管理作業・加工作業と遊牧地域の年間行事がどのように関連しているかを次に考察しよう。年間行事を表7に示した。表に示されるようにほとんどの行事が6月と10月という2つの時期に集中している。両時期は地域のアウルとアウルが近くに集まって、地域社会を形成することは上述したとおりであり、客や友人が集まり易くなる時期でもある。

表の赤ん坊の祝会というのは、アウルが分散していた時期に生まれた赤ちゃんの祝会であり、アウルが集合して近くなったときにこの行事は必ず行われる。オラズ祭はイスラム教徒のまつりで、30日間の断食を行うが、現地では遊牧作業のきつさという面もあって、60才以上のアウル・バスはアウルを代表して断食を行うが、60才以下のアウル・バスは行わず母が変わって行く。そしていずれの場合も簡単な祝会が行われる。クルバン祭は現在の農耕民を中心にした定住地では盛大に行われるが、遊牧地帯ではそれほどでもない。盛大に各種行事が行われるのは10月である。子供の割礼は男の子の祭で、結婚に次ぐ行事であり、1人っ子の場合その規模は結婚並になる。その例をあげるならば、屠殺家畜は羊5頭、大家畜1頭であり、集まる客は300-400人にのぼる。通常の例でも、羊3頭以上、

客は100人前後である。この割礼と結婚の際には競馬・女の男追い・相撲などの付滞行事が行われる。これはアウルだけでなく、行政が行う場合もある。これらの行事を当事者のアウルが行う場合には、アウルが事務局となり、他の親戚や友人のアウルもしくは同じ村のアウルの協力によって行われる。付滞行事では、勝ったものに賞品が出されるが、これは親戚アウルの多いアウルであれば、互いに出し合うことになる。賞品は

1等に大家畜1頭、2等に小家畜2頭、3等に着物という具合である。この場合は親戚アウル・友人アウル・全く関係のない同じ村の他のアウルから援助がある。例えば大小家畜・賞金・日常消耗品といった物的支援があり、この他家事や家畜の放牧管理の一時的代替もある。行事实施を中心に、これらアウルの協力によって家畜管理や家事などの仕事を共同作業という形で支援するのである。

このような援助や貸し借りはこの時期に限って普段より多くなる。この時期は通常無関係に見えるアウルが、なんらかの血縁関係、友人関係、部族や氏族関係によってより鮮明にいくつかの結合をもつのである。そしてこの時期はアウルにとって、当該アウルの誇りを上述の行事によって頌えて、アウルという「共同体」意識を強く内外に表すのであり、親戚や友人アウルの多さと普段からの他のアウルとの関わりや関係を示せる時期なのである。そして地域のアウルにとって、普段の貸し借りを返して、互いの助けやアウル間の関係を確認し合う時期でもある。マカン氏の回答によれば、「弱いものを助け、貸し借りを返し、礼を礼で返せば、いずれはすべてが戻ってくる」という遊牧社会の「アウル論理」が生きているのである。

6月は4-5月の最も多忙な作業競合時期を終え、7-9月という家畜肥育時期をひ

表7 遊牧地帯における年間行事

項目	5月末～6月末 (B地区)	9月末～10月末 (D地区)
結婚結納	○	○
結納お茶会	○	○
赤ん坊祝会	○	○
敬老お茶会	○	○
オラーズ祭	○	
クルバン祭	○	
郷帰り	○	○
郷帰お茶会	○	○
親戚訪問	○	○
割礼お茶会	○	◎
結婚お祝い	○	◎
競馬		◎
女の男追い		◎
相撲		◎

(資料) 94年12月現地聞き取り調査資料より作成。

註1) ○: 規模が小さく、周辺いくつかのアウルと戚範囲を超えないもので生産に対する影響は大きくない。

註2) ◎: 規模が大きく、村単位を超えて大騒になるものである。

かえているが、家畜の放牧管理を含めて作業競合はある程度少なくなっている時期である。そして地域や村の全アウルが比較的近接し地域社会を形成し、親戚や友人同志のアウルが家畜を混せて共同放牧して労働競合を緩和することができ、また5月上中旬に僅かながら家畜と畜産物の販売を行い、現金収入がある時期でもある。しかし、この時期は家畜の太り具合もあまり良好ではなく、地形はいくぶん険しく、競馬といった行事をするには不適當な場所に立地していることもあって、行事としては基本的に小規模なものにならざるえないのである。

しかし、10月は6月にみられるような制約要因がなくなる。大量の家畜と畜産物の販売による現金収入があり、地形的に盛大に行事を行うのに適している場所に位置している。そこで、意識的に加工作業を中断して行事が行われるのである。したがって、小規模の行事が6月に集中し、大規模のものが10月に集中する構造が形成されるのである。

以上の検討から、遊牧地帯の行事は次のような要因に規定されているといえる。第1は、當地の立地に規定されていることである。これは単に行事を行うにふさわしい地形といった自然条件のみではなく、遊牧生産の担い手であるアウルが集合する當地の立地という面も含んでいる。第2は遊牧経営の作業に規定されていることである。自然条件を有効に活用するため、家畜の飼養管理を最優先させ、それに伴う加工作業を実施している。しかし、飼養管理作業が一段落し、作業競合の少ない6、10月はアウル同志の共同や加工作業の中断によって行事実施が可能になるのである。第3は、収入の獲得時の行事実施という、遊牧経営の経営再生産に規定されていることである。自然条件に強く規定されているとはいえ、行事実施には多額のお金が必要であり、このために10月に大きな行事が行われるのである。

6. むすび

本稿では遊牧経営の実態を解明する前作業として、遊牧経営による年間作業と行事を取り上げ、これらの相互関係を分析してきた。その結果は、次のように要約される。

第1に、遊牧経営は合理的な家畜飼養管理のために自然条件を活用した营地設定を行っており、それには適時適地利用のための移動・引越が必要になることである。营地設定は遊牧地域の生活・営農用水の確保と草量といった飼料条件に規定されるため、これら条件を十分に確保しうる様に、自然条件に即して設定されている。移動はこのように設定した营地を家畜に適時適地利用させるため、水や

植生の季節的循環の差異に即して行われ、引越は人間が家畜に適時移動と適地利用のコントロールを行い、かつ家畜飼養管理や成長ステージに対応するために行われているのである。

第2に、遊牧全体の年間の作業・活動は、羊を主体とした5種畜の飼養管理作業を最優先していることである。営地設定が自然条件の利用や5種家畜の飼養に合理性を持つとはいえ、厳しい自然条件の中で経済活動を継続するためには家畜の飼養管理作業を最優先させざるをえないのである。そして加工作業や年間行事を家畜飼養管理作業に対して従属的に対応させているのである。

第3に、営地設定が家畜、特に主畜である羊の生理を重視しているため、家畜飼養管理作業の中でも羊の飼養管理作業を最優先した作業構造が形成されていることである。例えば、D地区で羊の分娩、B地区で羊の薬浴治療、A地区で羊の肥育、E地区で羊の交配、G地区では羊の放牧管理が優先して行われ、かつ営地間の大家畜と人間の移動速度は羊の移動速度に規定されていた。また作業順番も羊やその仔畜の成長ステージに規定されていたのである。

第4に、飼養管理作業と加工作業を同時平行的に進行させるために、アウルが形成され、その構成員間に明確な作業分担がみられることである。5種畜の適時適地移動利用による営地設定が異なり、各営地で複数労働力による作業実施が行われるため、数戸の遊牧家族から形成されるアウルという生産方式が形成されるのである。さらに、アウルの構成員はそれぞれの営地や時期に作業種類の違いや技術的要求度に応じて、作業を分担するのである。それは成人男子の作業、成人女性の作業、少年の作業というように明確に設定されているのである。

第5に、行事实施の経済規定性である。既に述べたように遊牧地域の行事は家畜の飼養管理作業、移動に伴う地域社会形成、行事实施にふさわしい営地の立地条件に規定されている。しかし、こうした自然条件のみでなく、家畜の肥育条件が整えられ、販売による現金収入の獲得という経済条件にも規定されているのである。

本稿は以下の三次にわたる実態調査にもとづいている。御協力いただいた諸先生に感謝申し上げたい。

第一次調査

1. 調査時期：1994年5月1日から5月4日まで。
2. 調査地点：春秋営地D地区。
3. メンバー：朝日田康司(北大農学部畜牧体系学講座教授)，花田正明(帯広畜大草地学講座助手)，安江健(北大農学部畜牧体系学講座研究生)，

フ・ルジ・ヤツフ° (北大農学部農業経営情報学講座博士過程)。

第二次調査

1. 調査時期：1994年9月22日から28日まで。
2. 調査地点：過渡的春秋営地C地区。
3. メンバー：黒河功(北大農学部農業経営情報学講座教授)，安江健(茨城大農学部助手)，フ・ルジ・ヤツフ° (同上)。

第三次調査

1. 調査時期：1994年12月22日から28日まで。
2. 調査地点：冬営地G地区と定住地F地区。
3. メンバー：朝日田康司(同上)，近藤誠司(北大農学部付属牧場助教授)，志賀永一(北大農学部農業経営情報学講座助教授)，松沢安夫(茨城大農学部教授)，松木靖(北海学園北見大学商学部講師)，安江健(茨城大農学部助手)，フ・ルジ・ヤツフ° (同上)。

所属はいずれも調査時である。

(註)

- (註1) 事例地区の行政組織は自治区→地区→県→郷→村となっている。
- (註2) 垂直的移動というのは対象地域の家畜移動は厳しい標高差を上下に移動しているパターンを指す。
- (註3) アウルとは数戸の遊牧民が共同し、遊牧を営農継続する生産方式である。詳しくは甫尔加甫・黒河功「中国遊牧経営の展開過程に関する研究(1)」『農経論叢』第50集，北海道大学農学部，1994年，p p. 131～150を参照。
- (註4) 営地は基本的に行政機関によって次のように命名されている。A地区を後部夏営地(奥の夏営地)，B地区を手前夏営地もしくは暫定夏営地，C地区を過渡的春秋営地，E地区を羊交配所，D地区を春秋営地，F地区を定住地，G地区を冬営地と呼んでいる。本稿ではそのまま引用した。
- (註5) 5種畜とは羊・山羊・牛・馬・駱駝という5種類の家畜を指す。遊牧民はベス・トルック・マル(5種畜)と呼んで，5種類の家畜という意味を表す。さらに遊牧民はこれら家畜の体形と習性に合わせて，次のような命名をつけて，普段の営地呼び名への根拠としている。体形的には羊と山羊をウサク・マル(険しい地形での放牧に適している小型家畜)，牛・馬・駱駝をイル・マル(大型家畜)と命名している。習性的には羊

・山羊・馬をテブン・マル（雪を掘って短い草を菜食できる家畜），牛をチャルー・マル（雪を掘れないが，高い草を食べる家畜），駱駝をタイガック・マル（険しい地形に滑落しやすい家畜）と命名している。これによって，遊牧民は後部夏営地A地区をウサック・マル夏営地，手前夏営地B地区をタイガック・マル夏営地，定住地F地区をチャルー・マル冬営地，冬営地G地区をテブン・マル冬営地といている。

（註6）コラとは冬営地にある家畜を入れる簡易の畜舎である。一般的にコングの一角に羊の糞の固まりで壁を作った屋根のないものである。コングとは家畜の糞の乾燥した粉のことであり，それは家畜が常時特定の場所に寝たりした場合に，家畜糞が散らばって乾燥状態になっていくが，しだいにその利用回数が増えるによって面的広がりや厚さが増していく。この乾燥した家畜の糞の粉をコングと呼ぶだけではなく，その場所自体をもコングと呼ぶ。コングは場所的に冬営地に多く分布しているが，遊牧民の引越移動経路上にもあるもので，長い歴史の中で遊牧民の引越移動の繰り返しによってできたものである。対象地域の場合はE地区からG地区までの間に約3500箇所があり，でき始めた時期の違いから厚さも違い，家畜を寒さから守れる程度が違うのである。例えば，一晩もつものと数日間もつものというようにさまざまであるが，遊牧民はもちろんいいコングを必要とする。このコングの居場所を知ってかついいコングを見分けるのはせいぜいアウルの長老とその後継者であるとアウルの長老と県畜牧局局長が回答している。

（註7）母畜仔嫌い防止とは，母畜が病氣（主に下痢）で仔畜を拒否する現象であり，他の家畜への感染を防ぐ消毒作業と仔畜への哺乳を行うことをいう。この両作業は女性によって行われる。余乳の搾りとは仔畜が母畜の乳を飲みきれない時に余乳を搾る作業である。この余乳は母畜の乳が足りない仔畜に哺乳される（仔畜の哺乳）が，多くの母畜が痩せて哺乳量自体が不足する時には山羊の乳で代用する場合がある。

（註8）トフトは一才の仔畜であるが，毛刈して離乳させた仔畜のことをトフトと呼んで本来の仔畜と区別する。トフトは後継畜（選抜を受けること）や販売畜（交換時に値段交渉できること）として処理できるものである。

（註9）アウル・バスはアウルの長老という意味で，経営者的役割を果たす。アウル・バスはアウルの全般的な経営を指揮し，後継者を育成する。しかし，後継者に権力を譲るのは本人が死去した後である。

（註10）中国農村地帯では家族を単位に戸数がカウントされる。

（註11）K 1はマカン・アウルの後継者であり，10才からマカンの指導を受けて

きたものである。後継者は遊牧民のアウルの内部から選ばれアウル・バスによって決まる。彼は5種畜の飼養管理に精通し、アウル・バスから委託された営地での管理作業や引越移動作業をできる上に、遊牧社会のルールまで知っていなければならない。K3はマカンの末っ子で、カサフ民族の習慣では財産の相続者である。しかし、アウル・バスの後継者には必ずしも財産相続者が選ばれないのである。